

史料からみた波佐見磁器

—18～19世紀「くらわんか」を中心に—

ハノイ大学 グエン・ティ・ラン・アイン

Hasami ceramic from the view point of historical document
- Focusing on “*Kurawanka*” in the 18th and 19th century -

Nguyen Thi Lan Anh (Hanoi University)

Abstract

Hasami-cho is located in the middle of Nagasaki Prefecture, northern part of Higashisonogi-gun, and is the only town in Nagasaki that does not have a coastline. Hasami-cho, which belonged to the Omura-han has been mass-produced as a pottery production area since the early Edo period. Hasami-yaki has been developed as a ceramic industry along with Arita-yaki and Mikawachi-yaki through 400 years. Hasami has 36 series of climbing kilns and had not only made great achievements in spreading porcelain widely among the common people, but also been a great influence on Japanese pottery culture, especially “*Kurawanka*”. *Kurawanka* is one type of popular ceramics that have been used for a long time as decorations and tableware, and is one of the things that can be boasted as a traditional Japanese culture. Until the Edo period, ceramics were still out of reach for the common people, but *Kurawanka* was produced and sold in large quantities by Imari merchants in Edo and Osaka. *Kurawanka* had succeeded in inspiring a feeling of warmth and familiarity among the common people and played an important role in the traditional cuisine of Japan at that time.

Key Words: Kurawanka, cuisine of Japan, Hasami-yaki, traditional cuisine of Japan

はじめに

波佐見町は、長崎県のほぼ中央、東彼杵郡北部の内陸部に位置し、長崎県内で海に面していない唯一の町である。江戸時代前期からの陶磁器生産地で、大村藩に属した波佐見焼は大量生産され庶民の器としても親しまれた。17世紀半ばには四皿山（三股山・中尾山・稗木場山・永尾山）で東南アジア向けの輸出品も作られるようになる（波佐見焼400年祭実行委員会，1999：12）。このころ中国では清朝への王朝交代の混乱期であったため、代

わりに波佐見など日本の磁器輸出が伸びた。しかし、18世紀に入ると輸出が伸び悩み、国内向けに「くらわんか」の大量生産が始まり、簡素な染付磁器が安価で供給された。

陶磁器は元々日用品として使われるだけではなく飾り物として多く使用された。日本人が長い暮らしの歴史の中で手に持つ食器と手の関係について器の形やデザインなど検討しながら生産したからこそ、時代によって器種、模様が様々である。本稿では1680～1860年代に生産された「くらわんか」碗・皿を単なる雑器としてではなく、特定の社会的・歴史的意義をもつ製品として捉え、いつから磁器が食卓に現れたのか、皿と碗を中心に調べていきたい。

1. くらわんかを生産した諸窯

有田焼や三川内焼と並ぶ磁器の窯業地として発展し、400年の歴史を持っている波佐見焼は連房式の登り窯36基が確認され、江戸時代に磁器の大量生産を実現し、日本各地に広めた功績は大きい。世界に類を見ない全長170mを超える窯をはじめ、多数の古窯の保存状況が極めて良いことから、肥前磁器生産開始期の様相を伝える畑ノ原窯、国内有数の青磁を生産した三股青磁窯、18世紀前半代の青磁を生産した長田山窯、くらわんか碗・コンブラ瓶等を大量生産した中尾上登窯と永尾本登窯の5か所の窯跡に加え、藩の管理による窯業指導が行われた皿山役所跡、三股砥石川陶石採石場が国の史跡に指定されている。また、1830～1843年頃、波佐見ではすべて全長100mを超える巨大な登り窯が8基存在していた。この時期の登り窯は大量生産のため極大化しており、当時の波佐見には世界最大の大新登窯（170m超・室数39）、中尾上登窯（160m超）、永尾本登窯（150m超）など、世界第1位～3位の規模を誇る登り窯が存在していた。波佐見の登り窯は、碗をふせたような形状の窯が山の傾斜を利用して階段状に連なっている構造である。それぞれの焼成室は通焰孔と呼ぶ炎の通路で繋がっているため火力を上げやすく一度に大量に焼き上げることが可能な作りになっている。そして、波佐見全体で年間48,446俵のやきものを生産し、特に中尾地区は21,966俵を生産しており、最も多かった（波佐見焼400年祭実行委員会，1999：15）。本稿では「くらわんか」を生産した代表的な窯である中尾上登窯と永尾本登窯を中心に述べていきたい。

① 中尾上登窯

中尾上登窯跡は東彼杵郡波佐見町中尾郷字白岳に位置している。中尾郷は、17世紀中頃

に窯が初めて築かれて以降、現在まで窯業を継続している集落である。集落の各所には、江戸時代の登り窯跡（大新登窯跡、中尾上登窯跡）や大正・昭和時代の石炭窯煙突などを始め、窯業に関連する遺産が多く残されている。1991年の長崎県文化課と2008年の長崎県波佐見町教育委員会により確認調査が実施されている。発掘調査と近世文書（『郷村記』）の検討から、中尾上登窯は江戸末期には33室の窯室を有し、全長約160mの巨大な登り窯であったことが判明している。前にも述べたように、この全長は、現在までに確認された窯の中では世界で2番目の大きさである。物原からは、17世紀中葉の青磁碗・皿、17世紀後半代の輸出用染付鉢、18～19世紀中葉のいわゆる「くらわんか手」の碗・皿、19世紀代の輸出用瓶である「コンプラ瓶」、明治から昭和初期にかけての染付碗・皿などが大量に出土している（宮崎，1993a：64）。近世から近代にかけての波佐見を代表する窯の一つである。

この登り窯では、廃窯となった昭和四年（1929）ごろまでの約280年間、白磁、青磁、染付の碗や皿などを中心に大量の陶磁器製品が焼成された。製品は全国各地へ販売された。

発掘調査によると、中尾上登窯跡から製品・窯道具をはじめとする膨大な量の遺物が出土した。本稿では「くらわんか」碗皿を中心にまとめていきたい。調査では陶磁器6728点、窯道具2522点の遺物が出土した。出土した製品は染付がそのほとんどを占め、青磁・白磁がそれに次ぐ（宮崎，1993a：48）。

17世紀中葉頃の製品と認められる碗は高台内無釉のものに限られる。形は丸形、端反形を中心とする。天目形が見られたが少ない。皿については丸形、折縁形、端反形を基本として、陰刻施文されたものが多く、口縁に辰砂を塗布するものも点数は少ないながら存在する。文様については皿では日の字鳳凰文、粗製の芙蓉手、牡丹文がある。また、内側面に文様を描くやや大振りの皿が多くなるようである。見込みの「日」の字は最後の四画目の横棒をいれないものが多い。また見込み中に「日」、内側面を芙蓉手とするものも散見される（長崎県波佐見町教育委員会，2008：12 - 14）。

18世紀から19世紀前半代の製品は端反形碗や深小丸碗など現れた。また海浜風景文が手描きされた染付碗、手描き菊花文の染付碗、手描きとゴム判でギリ松文をあらわした皿がある（長崎県波佐見町教育委員会，2008：14）。出土した遺物の中には明治・大正期の製品もみられる。

そして、『波佐見古陶磁器文様集』によると中尾上登窯で生産した製品には様々な文様が描かれている。例えば、植物（松、竹、笹、梅、松竹梅、菊、唐草、蔓草、楓、葦、桔

梗、菖蒲、花文様、草花文、雪輪草花文)、成り物、河骨、水山、格子、斜交線、縞、横縞、よろけ縞、九文、網目、掬文、業平、動物(鶏頭、竜、鳥、蝶、蝙蝠、千鳥、鳳凰)・自然(山水文、海浜風景)・品物(扇)・文字(福寿字文)、そして、染付白抜文と印判染付文(表文様)がみられる。

② 永尾本登窯

永尾本登窯は永尾郷に所在する。永尾郷地域では寛文6年(1666年)、三股皿山役所(現在永尾郷)を設け、押役(のち皿山奉行)を置いて陶業の保護育成に努めた。その結果、波佐見焼はめざましい発展を遂げた。

永尾本登窯は昭和25年まで焼かれ、登り窯跡の段々やレンガが一部残っている。登り窯跡の側の失敗品の捨て場も発掘されており、その出土品は古文書に残されている通り、江戸時代から昭和までに至るものであった。長年に渡って同じ場所が物原として使われていたので、焼き物の破片が約10mの高さで堆積していた。現在は、窯室の上部構造は残っていないが、窯室があった場所の石積みの壁は今も原型を留める箇所もある。窯室がなくなったあとの平らな部分は段々畑などに再利用されていた。この窯跡の横には物原の場所は、現在、地域の住民が畑として利用しており、畑の表面には耕すときに出てきたと思われる破片がたくさん見られた。

『郷村記』によると1666年から1950年ごろまで約300年にわたり、使われた永尾本登窯では庶民向け染付の食器(くらわんか碗、くらわんか皿)や、酒や醤油を輸出するときに使われた「コンプラ瓶」が主に作られていた。

1992年、長崎県文化課により確認調査が実施されている。江戸末期には29室の窯室、全長約155mの巨大な登り窯であったことが判明されている。前にも述べたように、現在まで確認された窯の中では世界で3番目の大きさである。窯のすぐ横の谷は物原であり、17世紀中葉から昭和時代にかけての失敗品で埋め尽くされている。永尾本登窯で生産された製品の文様は中尾上登とほぼ同様であるが、鶏頭、千鳥、鳳凰、山水文、福寿字文がみられない。

当時の発掘では陶磁器2913点、素焼の未製品184点、窯道具789点の遺物が出土した(宮崎, 1993b: 84)。製品様相は、中尾上登窯跡とほぼ同様で、とくに18世紀後半以降のいわゆる「くらわんか手」が大量に見られる。近世から近代にかけての波佐見を代表する窯の一つである。

1993年の波佐見町教育委員会の発掘結果からみると、出土された陶磁器は染付が主体で、白磁もわずかにみられた。器種は碗、皿、鉢などがあつた。出土した碗は小碗、中碗があつて丸形、筒形で薄い形状である。模様は簡単な梅樹文・二重網目文・草原文・格子・松葉・五弁花・矢羽文などがみられた。出土した皿は小皿、高台の深皿と丸形が多い。皿の模様は菊・龍唐草文・五弁花・「福」字・唐草・笹文・徳利などがある。出土した碗、皿は蛇ノ目釉剥ぎの見込み中央にコンニャク判を染付されている。出土陶磁器は、碗と皿など日用食品類の染付磁器が中心である。17世紀後半から20世紀前半にかけての製品がみられる。17世紀後半の資料は雲龍見込み荒磯文碗、鳳凰文碗、牡丹唐草鉢などの染付製品があり、1660年代には生産が行われたことがわかる（宮崎，1993b：102）。

2. くらわんかの変遷

波佐見では、16世紀末～17世紀初頭、朝鮮半島から連れてきた陶工によって初めは施釉陶器が生産されていたが、その後、地元で磁器の原料が発見され、染付と青磁を中心とする磁器の生産へ移行した。17世紀後半、肥前では東南アジア向けを主体とする海外輸出品の生産が始まった。波佐見も海外からの注文が殺到し、生産が追いつかなかった（波佐見焼400年祭実行委員会，1999：12）。18世紀になると、日常食器で、唐草模様を筆で簡単に描いた「くらわんか」が、丈夫で壊れにくい、厚手で素朴な製品のため、波佐見焼を代表する製品になった。江戸時代の庶民にとって磁器は高級品であったが、「くらわんか」は手ごろな値段で販売されていたため、多くの庶民の食卓を彩った。この波佐見焼の食器は、庶民の食文化を大きく変え、生活を豊かに彩った。

本稿では『波佐見古陶磁器文様集』、藤田コレクションと中尾上登窯・永尾本登窯の発掘調査結果に基づき、くらわんか碗・皿の変遷を見ていく。

2.1. 碗類

碗の器形について、18世紀前半まで丸形を主体としており、丸形以外には筒形、半球形、朝顔形が多くみられる（中野，2004：50）。代表的な文様は松竹梅文、雪輪花草文、二重網目文、また外面二重網目・内面一重網目・見込み花文がみられ、外面コンニャク印判五弁花、山水文・菊花文などを描くものもみられる。特に、1760～1770年代、外面コンニャク印判装飾は依然として多用される。その中で、半球型碗の外面文様にはコンニャク印判

団鶴文がよくみられる。また、朝顔の碗の見込みには二重圏線内コンニャク印判五弁花文が染付されている。その上、見込み中央に「寿」字文を描くものも現れる。その中で筒形碗は生産当初は大ぶりのものが多かったが、だんだん少なくなり、小ぶりのものがあらわれた。「寿」字文に雪輪花、コンニャク印判松皮菱文などが見られる（中野，2004：52）。

「くらわんか」の成立期は18世紀前半と考えられる。素地は白く薄手であり、二重網目文（図1）、雪輪草花文（図2）、見込みコンニャク印判五弁花文（図3）、見込み虫文（図4）が当時の波佐見の「くらわんか」を代表する文様の一つである。図1に描かれる網目文は中国の古染付に見られる。古染付とは、中国の明時代末期から清時代の初期にかけて景德鎮の民窯で生産された染付磁器のことであるが、これに魚文と網目文の組み合わせがよく見られる（鈴田，1984）。中国では魚は「福」と同じ発音であり、また卵をたくさん産むことから子孫繁栄などのおめでたい意味を持つ吉祥文として描かれている。それを考慮すると、その魚を絡め取る網目文もまた縁起物だと考えられる。また、図3にみられる五弁花文様は中国陶磁器を手本として、国内で独自に発展した文様である。また、白色、淡灰色が一般的である。



図1：染付二重網目文丸形碗 18世紀



図2：染付雪輪草花丸形碗
17世紀末～18世紀初頭

（くらわんか藤田コレクションより）



図3：染付丸形碗 18世紀後半



図4：染付団扇文丸形碗 18世紀後半

（くらわんか藤田コレクションより）

中尾上登窯・永尾本登窯の発掘から出土する18世紀後半の製品は碗・皿が主体である。器種は丸形、筒形、半球形、朝顔形、端反形、筒丸形、平形、筒端形など様々な形が現れ、「多器種」と呼ばれた（中野，2010：18）。また、この時期には広東形が新出する。前期の製品と比べ、製品の器壁は厚くなり、灰色・暗灰白色のものが一般になる。また、外面コンニャク印判装飾は廃れていく。文様はコンニャク印判五弁花が主流となり、二重圏線は見られなくなった。18世紀後半に「くらわんか手」やコンニャク印判の碗・皿類などが大勢を占める（藤田，2008：284-285）。

19世紀になると、筒形碗・朝顔形碗が姿を消すが、筒丸碗・平形碗と端反形碗が出現する。永尾本登窯から出土した雪輪草花碗・二重網目文碗などの丸形碗が端反形碗と共に出土している。また、この時期には線書きのみで文様を描く「素書き」がみられる。また、装飾は寿字以外、格子文、斜格子文の文様が一般である（中野，2004：52）。



図5：染付草花文広東形碗
18世紀 - 19世紀前半

（くらわんか藤田コレクションより）



図6：染付蝙蝠文端反形碗 19世紀前半



図7：染付格子楓文端反形碗 19世紀前半

（くらわんか藤田コレクションより）



図8：染付草花文端反形碗
19世紀前半

（波佐見古陶磁器文集より）

幕末を代表する器形の一つは広東碗である。大きなしっかりした高台を持ち、外に向かって広がった形をしており、清朝磁器の影響だという説もある。出土したものから見ると、

有田は蓋付きが多かったが、波佐見のほうは少なかった。

2.2. 皿類

染付皿について、18世紀から19世紀までは丸形小皿、丸形五寸皿、深皿、蛇の目凹形高台皿が中心である。まず、丸形小皿の文様には、見込みにコンニャク印判五弁花文、二重圏線で区画された内側面に連続唐草花などを描くもの、内側全体に文様を描くもの、見込み蛇の目釉剥ぎされ、内側面に格子文を描くものなどがある（中野，2004：56）。18世紀前半に生産された丸形五寸皿は、文様が様々であるが、18世紀中葉から文様のバリエーションが激減し、二重斜格子文皿と菊唐草文皿が多くみられるようになる（中野，2004：56）。また、深皿は18世紀前半から生産されたが、18世紀中葉以降、量産が開始されるようである。18世紀中葉から蛇の目凹形高台皿が生産されるが、主に見込み中央に染付で円形枠、その中に船帆などの文様を描き、二重圏線で区画される。

19世紀の丸形小皿は見込み蛇の目釉剥ぎされ、内側面に格子文を描くものが一般的である。丸形五寸皿の菊唐草文は18世紀前半から生産されているが、永尾本登窯では端反形碗の例があり、19世紀前半まで生産されると考えられる。



図9：染付梅樹折松葉文皿
17世紀中葉～17世紀後半

図10：染付折れ松葉文皿
17世紀後半～18世紀前半

（くらわんか藤田コレクションより）



図11：染付宝文皿 18世紀前半

図12：染付扇草花皿 18世紀後半

（くらわんか藤田コレクションより）



図13：染付菊唐草文皿
18世紀後半～19世紀初頭



図14：染付鳥居文小皿 19世紀中葉

(くらわんか藤田コレクションより)

図9・10とも見込み蛇の目釉剥ぎ、高台部無釉皿である。「蛇の目釉剥ぎ」は碗や皿の内底部を環状に釉を剥ぎ取る重ね焼き技法のひとつである。内底に無釉部分があるのは、食事の際に衛生的にも見栄え的にも良いものではないので、量産品に多用されると言える。

また、図11・図12は唐草文の裏文様をもつ染付小皿で、図13・14は菊唐草文、鳥居文皿で、いずれも見込みコンニャク印判五弁花文皿である。コンニャク印判は印判を使って施文すると推定されているが、具体的な方法は明らかでない。絵付においてはコンニャク印判・型紙摺等が考案され、大量生産による安価な商品を作り出すことに成功した。従来は手書きであった見込みの五弁花にも使われるようになる。コンニャク印判はいつごろから始められたか正確には判っていないが、江戸時代の終わりには姿を消した。窯跡においては、長崎県長与町長与窯や波佐見町百貫西窯・長田山窯・皿山本登窯、さらに佐賀県有田町無患子谷窯、山内町筒江窯や伊万里市市の瀬窯などで確認されている。器種は碗類が多く、外側に団鶴・菊・桐などの文様が施されている。

また、中尾上登窯や永尾本登窯から出土された製品はコンニャク印判のものが多く、19世紀初頭まで「くらわんか」によくみられる。長崎県波佐見窯群では大量生産のために時間をかけない簡略的手法が多用された。

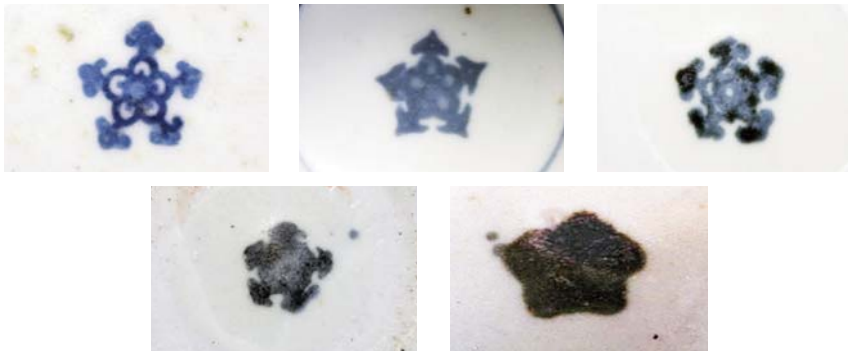


図15：コンニャク印判各時期（くらわんか藤田コレクションより）

図15の通りに五弁花文は時期的に変遷していく。最初期は丁寧で、五弁花の形がよくみられるが、その後、「コンニャク印判」による簡略化が進み、まるで星印のように見えるようになるが、五弁花文様の基本形は残している。以上のように、有田・波佐見は、ほぼ同時に「見込五弁花文様」を流行させたが、大量生産を目標とした波佐見は、文様の簡略化を更に推進していったと考えられる。

ここでまとめると、18世紀には碗の器種は様々な形があり、丸形以外、筒形、半球形、朝顔形がよくみられる。18世紀末以降、広東形碗、端反形碗、筒丸形、また19世紀中葉になると、平形碗、筒端反碗がみられるようになった。模様は二重網目文、雪輪草花文、見込みコンニャク印判五弁花文、見込み虫文などあり、その後は松竹梅文、雪輪花草文などが現れた。19世紀になると、前記の模様以外に雪輪草花・二重網目文模様は二重圏線や菊花文を入れるようになる。皿は、18世紀から19世紀中葉まで丸形小皿、丸形五寸皿、深皿、蛇の目凹形高台皿が中心で、変化が大きい。

3. 食文化における「くらわんか」

文献や絵画、考古資料を中心に、日常生活で「くらわんか」はどのように使用されたか。日本食文化で「くらわんか」が登場した状況について述べていく。

3.1. 食膳に出始める陶磁器

江戸時代まで陶磁器はまだ一般庶民にとっては手の届かないものであった。17世紀末頃に肥前窯業は国内向けの磁器、特に安い日用食器を生産するようになった。「くらわんか」

の時代、波佐見では碗・皿をはじめ、様々な種類の磁器が生産されていた。量産品のため丁寧なつくりではないが、素早い筆使いによって生き生きとした模様が描かれ、やや灰色がかかった釉色やぼつりとした量感に素朴な温かみを感じ取れる（長崎県波佐見教育委員会，1999：16）。

式正の膳組みは室町中期から決まってくるのであるが、基本的には四椀（飯・汁・平・壺）と一杯（高杯、もしくは腰高の皿）からなる。江戸期を通じて全体的に見ると、式正の膳組は漆器が中心であった。しかし、江戸中期から壺にかわって磁器の猪口が登場した。ついで、魚皿が登場、かわって高杯が後退する。更に、平椀にかわって、磁器の膳形式の一角を占めるようになるのである（旅の文化研究所，2000：63）。

また、江戸後期の「江戸高名会亭尽」（広重画）などの絵画資料をみると、宴席の中央に料理が盛り合わせてあり、小皿に取り分け食する形式が確認できる（図16・17）。

18世紀中ごろ、国内に磁器の食器が流通し始めたが、まだ高級食器として珍重されていた。それは「料理早指南」などでみる本膳形式では皿二点以外の器はすべて漆器であることが明らかである（図18・19・20）。

江戸時代の屋敷地などでは大皿や大鉢、高価な食品が出土することがあり、身分の高い武士や豪商、土豪の屋敷、料理店などで使用されたと考えられる。また、絵画をみると、江戸市民における料理屋、屋台で鉢・大皿・深皿・四角皿・小皿が漆器に代わり順次登場した。大家の会席膳を部分的に磁器が彩ることとなったが、まだ少なかった。

その上、『経済をしへ草』と『百人一首 地口絵手本』をみると、当時一般家庭への食器はまだ普及していなかった。農民の食事には一汁一菜を基本として、ご飯碗と汁椀が漆器で、小さい皿が磁器に描き分けられているのである（図21）。その後は「一汁二菜」とか「一汁三菜」になる（旅の文化研究所，2000：71）。

当時、陶磁器は高級なものであったため、膳組に出るのが少なかった。食膳の組み立てからみると、魚、酢の物が多かったので、機能的には磁器が向いていた。猪口には酢の物を入れるので、漆器の場合は内面が傷やすいし、また、焼魚は脂が出やすく、皿を汚すが、漆器の場合は強く洗うことができないのである。したがって、膳組みで磁器の猪口や魚皿が一番早く登場した理由だと考えられる。また、猪口や魚皿の登場後、漆器飯碗から飯碗が移行し、磁器の食器の発達がみられた（図22）。図22は座席での宴席が描かれ、染付・青磁・漆器の大皿が中心となる。日本の食文化には磁器は高級なもの、庶民には手が届かないという当時の常識を大きく変え、日本の食文化の発展に大きな影響を与えた。



図16 「江戸高名会亭尽」により



図17 『江戸高名会亭尽』画により

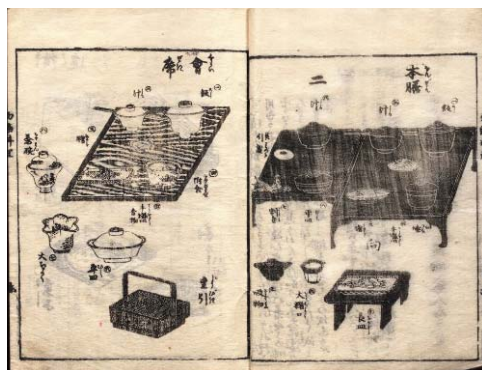


図18 本膳料理と会席料理（『料理早指南』により）



図19 夜食膳



図20 塩物魚調理

（『料理早指南』により）



図21：一汁一菜
『経済をしへ草』により



『百人一首 地口絵手本 前』により



図22：「忠臣蔵七段目」により

3.2. 「くらわんか」の登場

『庶民向けの陶磁器の生産と流通』の報告では、全国の発掘現場から出土された製品は肥前産陶磁器が多かった。ここでは発掘資料からみる肥前産陶磁器若しくは「くらわんか」の登場について3ヶ所の結果を事例にし、肥前産製品または「くらわんか」の登場について調べていく。

① 長野県松代城下町跡

松代城は長野県長野市にある城跡で、国の史跡に指定されている。戦国時代から活躍した真田家が、江戸時代初めに上田地域からこの地に移された後、明治時代に入るまでの250年間、松代藩十万石の城下町の中心として発展したところである。真田家の居城であった松代城跡には江戸時代を中心とした建物がそのまま残る。発掘調査では、本丸や二の丸にあった御殿や門などの礎石や、地表下深くまで続く石垣、内堀にかかっていた橋の橋脚などが確認された。また、当時の建物に関する瓦や釘、木材のほか、土器や陶磁器など生

活に密着した道具類も出土した。

調査の報告によると、17世紀前半では瀬戸、美濃産が中心であったが、17世紀後半から次第に肥前産へと変わっていく。松代城下町跡の東・北信地域から出土した製品は以下の通りである。

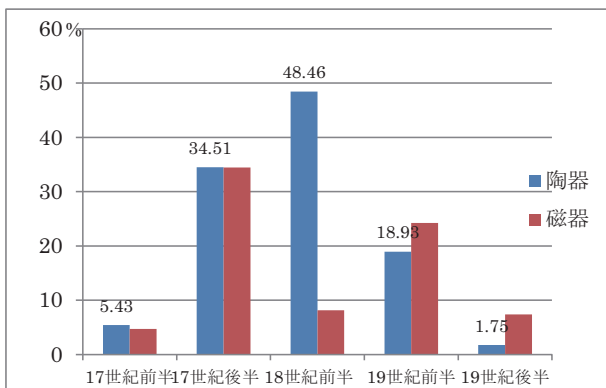


図23 松代城下町跡（東・北信地域）

東・北信地域では17世紀前半は瀬戸美濃陶器が主体で、肥前産陶磁器が少なく、砂目積みの小皿が中心である（内訳：陶器5.43%、磁器4.71%）。17世紀後半から19世紀前半までは肥前産陶磁器が主体となる。細かくみると17世紀後半には肥前産陶磁器が出土陶磁器全体量の7割を占める（陶器34.51%、磁器34.47%）。18世紀前半には肥前産陶器が48.46%で、肥前産磁器が8.17%を占めた。19世紀前半には陶器が18.93%、磁器が24.24%を占めた。そして、19世紀後半には陶器が1.75%、磁器が7.4%を占めた（竹内，2008：171-173）。

② 金沢市内遺跡

金沢城跡の主要な範囲は、本丸、二ノ丸、三ノ丸、新丸、金谷出丸など総面積約30ヘクタールに及び、重要文化財の金沢城石川門・金沢城三十間長屋・金沢城土蔵（鶴丸倉庫）などが伝わるほか、大規模な近世城郭としての縄張りや高い技術によって構築された石垣などが良好に残り、近世の大大名の政治権力や築城技術を知る上で重要である。ここでは木の新保遺跡、広坂遺跡を例にして肥前産もしくは「くらわんか」の登場を明確にしたいと思う。

木の新保遺跡から出土された陶磁器の報告によると出土された肥前磁器は478点（54.4% 碗254点・皿98点）で陶器は158点（19% 碗45点・皿10点他）を数える。木の新保遺跡で出土された磁器は前代から続く碗種の外、京焼の影響を受けたとされる半球碗、コンニャ

ク印判、二重網目文などの丸碗がみられる（藤田，2008：284-285）。それは18世紀中葉から18世紀後半の間だと判断された。

また、広坂遺跡では肥前産磁器が76点（47.8% 碗60点・皿9点他）で陶器が44点（27.7% 碗3点・皿1点他）出土している。その中には丸碗、波佐見系の見込みコンニャク印判五弁花の染付の皿がある。この時期は肥前産が主体となっている。19世紀と判断される磁器103点（49.8% 碗32点・皿17点他）、陶器が23点（11.1% 碗3点・皿4点他）出土している。磁器では小丸碗、小広東碗などが見られる（藤田，2008：285）。17世後半から18世紀中葉までに出土された製品を比較すると、肥前産陶器の量が減った。

③ 新潟県内遺跡

新潟県は本州の日本海側に位置し、長い単調な海岸線を持ち、越後山脈が連なる県である。新潟の8遺跡の発掘結果によると、17世紀前半まで食膳具は漆器を使用していたが、その数は減少し代わって肥前陶磁器の碗皿が主流となった。17世紀後半以降、食器は陶磁器の碗皿となり、現在まで続くことになる。しかし、18世紀前半まで出土した陶磁器の中の陶器、磁器の割合はほぼ同じであるが、碗と皿では皿のほうが多い。18世紀後半の越後の8遺跡から出た碗は肥前のみとなる。この遺跡には19世紀前半まで肥前産陶器が独占したが、19世紀中頃には独占が崩れ地方産が流入した（安藤，2008：328）。

18世紀後半のほとんど遺跡では肥前陶磁器のみとなり、碗が高台粗製碗（45%）を占め、他には薄手半球碗、小丸碗、小広東碗がある。皿は蛇の目釉剥ぎで高台施釉など器種が豊富である。しかし、19世紀前半では肥前磁器碗のみになり、皿の量が減少する。器種は小丸碗、薄手半球碗に加え広東碗、小広東碗が見られるようになる（安藤，2008：328）

『庶民向けの陶磁器の生産と流通』の報告によれば、肥前産陶磁器が全国で出土され、17世紀から19世紀後半まで食文化に対する役割も確認できた。17世紀末～18世紀後半に清朝磁器の復興によって輸出は伸びなくなり、国内市場の拡大に力が注がれるようになる。国内向けの日常雑器としてくわんか手と呼ばれる磁器が大量生産され、近世において最も広く伊万里磁器が普及した（奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会，2004：5）。

当時、庶民が日常用いていた焼物にはどんなものを使用したのか、発掘結果に基づき、神奈川県教育委員会、神奈川県歴史博物館が主催した展覧会では庶民向けの食膳が復元されている（図24・25・26）。最初は漆器品が中心であったが、陶磁器が少しずつ登場して食文化に漆器品と共に欠かせないものとなる。

江戸時代の農民の食事は一汁一菜であるが、食事のスタイルは、一つのテーブルを皆で

囲むのではなく、一人ずつ小さな膳が用意される銘々膳が基本である。農家や町人たちは、食事をする時に箱膳を使用した。子ども以外の家族は、それぞれ「箱膳」という小さな木箱に、茶碗、箸、小皿をセットにして使用していた。箱膳は蓋のついた四角い箱のような形をした膳で、1人用の箸、飯茶碗、汁椀、湯飲み茶碗や皿が収まるようになっている。食事の時、箱膳の木箱の蓋を返し箱に載せると小さなお膳になる。その上に、いつもは箱の中に収めている器を載せて食事をした（旅の文化研究所，2000：81）。



図24 復元食膳



図25 復元食膳（庶民）



図26 復元食膳（庶民）



復元食膳の食器収納

（神奈川県立歴史博物館により）

図24・25・26は当時の食事を復元したものである。鉢・大皿・深皿・四角皿・小皿が漆器に代わり順次登場したが、庶民の食事には一汁一菜を基本として続いていた。高級品であった磁器の器は18世紀になると大衆化する。18世紀前半くらいから作られ始めた「くらわんか」の碗や皿が、それ以前とは比べものにならないほど大量の陶片となって出土している。

終わりに

佐賀と長崎の県境に位置する長崎県波佐見町は、磁器で有名な焼き物の町で400年も日々

の生活に根ざした磁器を作り続けてきた。使いやすい日常の磁器は飾りや食卓用の食器として古くから使われている陶芸品の一つで、日本の伝統文化として誇れる物の一つに挙げられる。庶民の器として誕生した波佐見焼は、長い歴史の流れの中で、素晴らしい伝統美を培ってきたのである。波佐見では日用食器が生産され、伊万里商人の手によって江戸・大坂方面に大量に売り出された。その時代の人々の暮らしに合わせ、変化し、改良してきた波佐見は今も脈々と生き続けている。海外輸出時期に波佐見は有田と共に海外からの注文が殺到し生産が追いつかなくなり、次々と新たな窯が開かれた。波佐見焼が荒波を越えて海外へ運ばれていた時代は17世紀後半から末頃まで、約30年間続いた。この時代、輸出景気の追い風にのり、波佐見は磁器の大生産地へと発展を遂げた。その後、波佐見の「くらわんか」は器種・模様が豊富で食卓を彩った。磁器を庶民に広く普及させるのに大きな功績を残し、日本のやきもの文化へ多大な影響を与えた。



図27 中尾上登窯跡



図28 永尾本登窯跡



図29 中尾上登跡出土製品



図30 永尾本登跡出土製品

参考文献

1. 安藤正美 (2008) 「越後の江戸後期における庶民向け陶磁器の様相」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通』九州近世陶磁学会
2. 鈴田由紀夫 (1984) 「印版 (1) —コンニャク版—」『セラミック九州 No. 10』佐賀県立九州陶磁文化館 (https://www.umakato.jp/column_ceramic/a_vol01.html)
3. 高井蘭山 (1833) 『経済をしへ草』出版社不明
4. 旅の文化研究所 (2000) 『落語にみる江戸の食文化』河出書房新社
5. 竹内靖長 (2008) 「長野地域の江戸後期の陶磁器流通」『江戸後期における庶民向けの陶磁器の生産と流通』九州近世陶磁学会
6. 中野雄二 (2004) 「18世紀中葉～19世紀中葉の波佐見窯業について」『金沢大学考古学紀要』金沢大学, 27号
7. 中野雄二 (2010) 「くらわんか茶碗のひろがり」『金沢大学考古学紀要』金沢大学, 66号
8. 長崎県波佐見町教育委員会 (2008) 『中尾上登跡』長崎県波佐見町
9. 長崎県窯業試験場 (1986) 『波佐見古陶磁器文様集』肥前波佐見焼振興会
10. 奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会 『岸岳系から銅版摺まで - 奈良女子大学構内遺跡出土遺物にみる肥前陶磁の世界』奈良女子大学
11. 波佐見焼400年祭実行委員会 (1999) 『波佐見焼400年の歩み』長崎県波佐見町
12. 藤田邦雄 (2008) 「再興九谷からみる後末期の庶民向け陶磁器の生産と流通」『江戸後期における庶民向けの陶磁器の生産と流通』九州近世陶磁学会
13. 梅亭樵父 (出版年不明) 『百人一首地口絵手本』出版社不明
14. 宮崎貴夫 (1993a) 「中尾上登跡」『波佐見町内古窯跡群調査報告書』長崎県波佐見町教育委員会
15. 宮崎貴夫 (1993b) 「永尾本登跡」『波佐見町内古窯跡群調査報告書』長崎県波佐見町教育委員会

本研究はJSPS 科研費 JP17F17304の助成を受けたものである。筆者の遅筆につき、長崎大学野上建紀教授、波佐見教育委員会中野雄二氏に多大なご迷惑をおかけいたしました。この場を借りて深く感謝申し上げます。